

抜くために腰を引くとこちらの腰までつられて動き、それを制するように、お父の手が少年の腰骨をつかむ。そして動かぬよう固定されたまま、ずろろ……♡と
だいじゃ
大蛇のようなそれを抜き取られ、抜け去るギリギリまで行ったかと思うと、

「ア”あ…ツッ！♡♡♡」

往路をふたたび進まれて、みりみりこじ開けられる感覚に身を反らす。

「あ……♡♡ああ……っ♡だ……め…え”…ツッ！♡♡♡」

下半身が他人のもののように、がくがく痙攣する。

あまりの雄茎の大きさに、孔全体がじいんと痺れたようになって、気持ちいいのかどうかもよくわからなくなってきた。ただ、血のつながった肉親のそれを拒絶するように、内壁が切迫した収縮を繰り返している。

「まどろっこしいな。ほら…、ほら……あのことを息子君に喋ってもいいわけ？」

パンッパンッパンッ——！

若い男の声と、さらなる鞭の音。

お父はわずかに息をつめたものの、一声も発さず腰の動きを速めはじめた。